

新しい「居場所」から余暇を再編集する



Asada Wataru

豊かな余暇を生きるために欠かせないのは、
家と職場以外の、もうひとつの居場所――。
自宅の一部を開放しコミュニティとして提供する「住み開き」や、
芸術文化の「場」をつくるユニークな催しなど、
アサダワタル氏が手がけてきたさまざまな
「日常再編集」の試みから、
余暇の新しい可能性を探ってみよう。

Part 6

Special Feature / Beyond ON-OFF

先だつてある企画で「いろいろ、か
せぐ(稼ぐ)」というテーマのト
クをした。人はお金だけじゃない
いろいろな価値を稼いでいる、それに対し
意識的になることで生き方・働き方が
変わるのでは? ――こんなことを参
加者と語り合いつつ、筆者自身の仕事
の変遷を紹介したのだが、まずもって
この「稼ぐ」という言葉の語源が気
なつたので調べてみた(*1)。

稼ぐという言葉は(中略)紡いだ
糸を巻き取る道具の「かせ」に由来
する説がある。紡いだ糸をかせに巻
くことを「かせぐ」という。そして、
かせは休みなく動いているように見

えることから、かせのように仕事に
励むことを「かせぐ」といったもの
と考えられる。また、稼ぐの「かせ」
は「かせ(日迫)」の意味で、昼夜
に迫り、止まる所を知らないことを
いったとする説もある。

このように、稼ぐという言葉は、も
ともとは日夜仕事に励むことを表して
おり、お金を得ることは後世になつて
派生した二義的な意味であつたことが
わかる。これはまさに筆者が語りた
かつたことで、語源的に見ても24時
間、365日という限られた時間の中
で、「稼ぐ」にオフタイムはないのだ、
と気づかされた。文字通り、「あの人が

つも忙しそうにバタバタしているね」
といったニュアンスではなく、「いまこ
の瞬間も自分は動き、何か」を常に稼
いでいる」という「意識」の問題なのだ。
この意識を持った状態で考えると、
「働く(労働)」と「休む・遊ぶ(余暇)」
との間にあるボーダーが、とても曖昧
に感じられてくる。

家や職場以外の、 第三の場所

また、余暇を語る上で重要な言葉と
して、「サイドブレイス」を紹介した
。都市生活者にとって必要な居場所
として、第一の場所(ファーストブレ

イス)が「家」、第二の場所(セカン
ドブレイス)が「職場」、そしてその
二つの中間地点にある第三の場所、す
なわち「心のよりどころとして集う場
所」を「サイドブレイス」と呼ぶこの
考え方は、1989年に米国の都市生
活学者、レイ・オルデンバーグによつ
て提唱された。日本においても現在、
ほっこりくつろげるお洒落なカフェ
や、音楽や絵画が楽しめるアートのス
ペース、地域の集いの場としてのコ
ミュニティカフェなど、さまざまな形
態のサイドブレイスが存在している。

実際、筆者自身もこの10年間、このよ
うなスペースの運営にいくつも関わつ
てきた(*2)。その中で、とりわけ
ここ数年感じることは、「サイドブレ
イスが果たす社会的機能が、ファース
トブレイスやセカンドブレイスの中
に「織り込み済み」になつてきている」
ということだ。噛み砕いて言えば、家
や職場自体に、家族や同僚を超えた新
たなコミュニティが生まれつつあると
いうことである。例えば、シェアハウ
スやシェアオフィス、コワーキングス
ペースといった言葉を、昨今よく耳に
されないだろうか。

家族以外の複数人と共に暮らすシェ
アハウスの存在は、とりわけ新しいも
のではない。しかし、筆者の学生時代
であつた1990年代後半〜2000
年代初頭におけるシェアハウスの存在
意義は、「一緒に住むと安く住めるか
ら」という経済的な理由が圧倒的なも

のであつた。しかし現在は、生活を
シェアすることが、その人のライフス
タイルや働き方の構築に強く結びつき
つつある。つまり文化的な価値観や社
会的な人脈を獲得するためのシェアに
移行しつつあるのだ。筆者は2006
〜10年、大阪府北区南森町の住居用マ
ンションの一室にて「208」という
スペースを数人の仲間たちと運営して
いた。ライター、Webデザイナー、
翻訳家、百貨店や映像制作会社の社員
など6人ほどのメンバーが集う、シェ
アハウス兼シェアオフィスとしての取
り組みであつた。メンバーは各々が鍵
を持ち、時に家として使い(泊まった
り、風呂に入った)、ご飯を作つた
り、時に職場としても活用した(ノー
トPCを持ち込み仕事をしたり、打ち
合わせ場所にしたり)。あわせて、こ
のメンバー同士が持っているスキルや
人脈をシェアする意味も込めて、月に
一度、メンバーの推薦によるゲストを
招いてのトークサロンを開催。メン
バー自らがパスタを作り、限定15名の
一般参加者をホームページで募り、集
まつた者同士がゲストを囲みながら飲
食を共にし、さまざまなことを語り合
う場。その「場」づくりを繰り返して
いくことにより、異分野・異領域の人
びとが自らの専門性の延長では築くこ
とができなかつた価値観の融合を生み
出すきっかけとなつた。また我々と同
じように、生活や仕事をシェアする環
境をオーガナイズする者同士のネット

ワークが生まれてくる過程で、筆者は
「自宅を代表としたプライベートなス
ペースを、自分の好きなことをきつ
けに無理なく他者へとちよつとだけ開
く」活動を、2008年より「住み開
き」(*3)と名付け、その実践を提
唱する取り組みを始めた。このように
考えると、もはやどこからどこまでが
私生活で、仕事で、趣味で、といった
ボーダー自体がいままさに日々更新さ
れ続けているのだ。

「ポスト余暇」を 生きる試み

「稼ぐ」と「サイドブレイス」という
二つのキーワードから、余暇と労働を
二分するボーダーそのものが溶解して
いつている様を語ってきた。そこから
考えるべきことは、そもそもこの
「余った暇」という概念そのものを再
編集する知恵が今後求められていくの
ではないかということだ。それは、「余
暇」そのものの意義だけでなく、新し
い働き方、そして仕事を通じた新たな
社会貢献の有り様をも考えるきつかけ
を發明していくことにつながるであろ
う。次頁では、いまこの時代に求めら
れる「ポスト余暇」、すなわち本特集
テーマである「本暇」を体現するため
のレッスンの思考、および筆者が取
り組む芸術文化実践について、写真と
キャプションで紹介するので、どう
ぞ参照されたい。

Special Feature Part 6 / Essay



(*1) 語源由来辞典 <http://gogen-altitude.com/kasaguan.html>(株式会社レンクハイス)より
「日本語源大辞典」(前田富祺監修、2005年、小学館)にも同様
の記述が見られる。
(*2) アサダワタル「築港ARC:多
分野を繋げるアートリソース
活用とプロジェクトメソッド創出」
「アートイニシアティブ」リレ
ー「1する構造」(BankART1929
編、2009年、BankART出版、
180〜183頁)
アサダワタル「日常編集」『編集進
化論』――『住み開き』(編集進
化論) 仲俣暁生編、2010年、フィ
ルムアート社(121〜138頁)
(*3) 「住み開き」――家から始
めるコミュニティ(アサダワタル著、
2012年、筑摩書房)

Project 4



ライブパーティー

「Club SHIDAX
by
KAROKEDISCO!!」

スナック風
カラオケで
出会いを演出

日本人の余暇的趣味の代表・カラオケをテーマに、カラオケボックスを借りきり本気でイベントをやった一例。参加者はプロのクラブDJ選曲のJ-POPで踊りながら歌いたい曲をリクエスト、順にマイクを回していく。カラオケボックスなき時代の“スナックスタイル”を現代的に採用、歌を通じ見知らぬ人同士の出会いの場を創出した。

主催：カラオケボックスの新しい使い方実行委員会

Project 3



ボードレス・アートミュージアム

「NO-MA」

表現の普遍を
観る者に問う

近江八幡市にある昭和初期の町家を改装し2004年6月に開館した。福祉分野が生んだ美術館のユニークな試みとして、福祉施設で生活する知的障がい者の斬新な美術作品と、現代美術の気鋭の作品を並列に展示。福祉の世界の“余暇活動”で生まれた造形物は、その枠組みを超え、広く社会に表現の可能性を提起。筆者も運営委員の一人。

運営：社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団

Project 2



ワークショップ

「コピーバンド・
プレゼントバンド」

思い出の曲を
子どもたちの
演奏で贈る

高知県四万十市西土佐小学校で2012～13年に開催。児童クラブの高学年児童60人が「自分と同じ年くらいの時に最も好きだった音楽と、その理由」を家庭内インタビュー。結果から選曲し、コピーバンドを結成。最後は参観日を兼ね家族に演奏を贈る。地元のバンド経験者が指導するなど、普段の授業にない地域と家族と学校の出会いを演出。

主催：「トヨタ子どもとアーティストの出会い in 高知」実行委員会

Project 1



ワークショップ

「あなたの音楽を
傾聴します」

音楽 CD を
介して記憶を
分かち合う

社会的マイノリティの立場に置かれた人をはじめ、多様な背景を持つ人びとが参加し、各々が選んだCDと曲を流しながら少しずつ言葉を紡いでいく。2012年に渋谷ギャラリー・ルデコで開催された。肩書きや容姿に対する先入観を可能な限り取っ払った状態でお互いに出会うこのような表現活動は、これからの余暇にも求められるのでは。

主催：津田塾大学ソーシャルメディアセンター

Project 4



湖と猫(仮称)

(滋賀県大津市)

改修した
家を自ら
“住み開く”

筆者の自宅兼オフィスであるスペース。2012年の春、大阪から琵琶湖に近い大津市の長屋に転居し、築50年ほどの長屋を建築に携わる友人たちとともにプチリノベーションした。時折、Facebookなどで参加を呼びかけてトークイベントを開催。大阪と東京の知人と、滋賀で活動する知人とをつなぐ役割を少しずつ実践している。

Project 3



千代の家

(大阪市福島区)

写真で
人びとを
つなぐサロン

長年の間、ご主人と写真館を運営してきた藤井千代栄さん。還暦を迎え、館を閉めたら世間とのつながりが保てなくなると考え、元写真スタジオだった店舗付住宅を、2010年よりサロンに開放した。これまでのキャリアを生かして「写真整理楽」というワークショップを目玉に、さまざまな世代が交流する場づくりにいそしむ。

Project 2



21世紀大学

(大阪市中央区)

下町の一角に
開講した
小さな学び舎

職業訓練施設で企画コーディネーターとして働く30代前半の梅山晃佑さんが、長屋の2畳間を「大学」として2008年より開放。仕事の合間に、誰もが講師・生徒になれる自宅大学を開講し「学び」や「働き方」をテーマに一貫した社会活動を行う。また、梅山さんは会社の事業として2012年より自宅近所でコワーキングスペース「往来」も運営中。

Project 1



208 南森町

(大阪市北区)

「住み開き」
誕生の地

筆者がはじめに取り組んだ「住み開き」スペース。シェアメンターの推薦による月例ゲストトークサロン「SHOWCASE」は合計65回にまで及び、「住み開き」というコンセプトはこの実践から生み出された。2010年以降は、常連だった参加者によって古本屋兼サロンとして運営され、人的ネットワークが引き継がれている。



「場」をつくる。

美術や音楽が
人びとの間のボーダーを取り去り、
コミュニケーションをつないでいく。
芸術文化を生み出す
さまざまな「サードプレイス」の提案。

「住み開き」

好きなことをきっかけに、プライベートな
スペースを、他者へ向け、ちょっとだけ開いてみる。
いったいどこからどこまでが
私生活で、仕事で、趣味で、というボーダーが、
日々更新され続けている。